

狐

永井荷風

青空文庫

こにわ
小庭を走る落葉おちばの響ひびき、障子をゆるする風の音。

私は冬の書齋ひるの午過ぎひる。幾年いくねんか昔に恋人とわかれた秋の野の夕暮を思おも出いだすような薄暗い光の窓に、ひとり淋しく火鉢にもたれてツルゲネーフの伝記を読んでいた。

ツルゲネーフはまだ物心もつかぬ子供の時分に、樹木のおそろしく生茂った父が屋敷の庭をさまよつて、或ある夏の夕ゆう方かたに、雑草の多い古池のほとりで、蛇と蛙いたまの痛いたましく噛み合っている有あり様さまを見て、善悪の判断さえつかない幼おさなご心ころに、早くも神の慈悲心

を疑つた……と読んで行く中に、私は何時となく理由なく、私の生れた小石川金富町こいしかわかなとみちようの父が屋敷の、おそろしい古庭のさまを思い浮べた。もう三十年の昔、小日向水道町こびなたすいどうちように水道の水が、露草つゆくさの間を野川の如くに流れていた時分の事である。

水戸の御家人や旗本の空屋敷あきやしきが其処此処そこここに売物うりものとなつていたのをば、維新の革命があつて程もなく、新しい時代に乗じた私の父は空屋敷三軒ほどの地所を一まとめに買い占め、古びた庭園や木立をそのままに広い邸宅やしきを新築した。私の生れた時には其その新しい家の床柱いえにも、つやぶきんの色の稍ややさびて来た頃で。されば昔のままなる庭の石には苔いよいよ深く、樹木の陰かげはいよいよ暗く、その最も暗い木立の片隅の奥深いところには、昔の屋敷跡

の名残だという古井戸が二ツもあつた。その中の一ツは出入りの
 安吉やすきちという植木屋が毎年々々手入ていれの松の枯葉かれは、杉の折枝おれえだ、桜
 の落葉、あらゆる庭の塵ちりあくた埃ちりあくたを投げ込み、私が生れぬ前から五
 六年もかかつて漸ようやくに埋め得たと云いう事ことで。丁度四歳の初冬の或
 る夕方ゆうかた、私は松や蘇鉄そてつや芭蕉ばしようなどに其の年の霜よけを為なし終
 えた植木屋の安やすが、一面に白く乾いた茸きのこの黴かび着かいている井戸側いどがわ
 を取破とりこわしているのを見た。これも恐ろしい数ある記念の一つで
 ある。蟻、やすで、むかで、げじげじ、みみず、小蛇こへび、地蟲じむし、は
 さま蟲、冬の住家すみかに眠すつて居たさまざまな蟲むしからは、朽ちた井戸
 側の間あいだから、ぞろぞろ、ぬるぬる、うごめき出いだし、木枯こがらしの寒い
 風かぜにのたうち廻まわつて、その場に生なまじろ白しろい腹を見せながら斃死くたばつて

しまうのも多かつた。安は連れて来た職人と二人して、鉋なたで割つた井戸側へ、その日の落葉枯枝を集めて火をつけ高たかぼうき箒きでのたうち廻つて匍出す蛇、蟲けらを搔寄せて燃もした。パチリパチリ音がする。焰ほのおはなくて、湿つた白い烟けむりばかりが、何とも云えぬ悪臭を放ちながら、高い老樹の梢こずえあいだの間に立昇る。老樹の梢には物すごく鳴る木枯が、驚くばかり早く、庭一带に暗い夜よを吹下ふきおろした。見えない屋敷の方で、遠く消魂けたましく私を呼ぶ乳母の声。私は急に泣出し、安に手を引かれて、やつと家うちへ歸つた事がある。

安は埋めた古井戸の上をば奇麗に地ならしをしたが、五月雨さみだれ、夕立、二百十日かと、大雨たいうの降る時々地面が一尺二尺も凹くぼむので、其ごの後は繩を引いて人の近ちかづかぬよう。私は殊ことさら更父母から厳しく

云い付いけられた事を覚えて居る。今一つ残つて居る古井戸はこれこそ私が忘れようとしても忘わすられぬ最も恐ろしい当時の記念である。井戸は非常に深いそうで、流石さすがの安も埋めようとは試みなかった。現在は如何いかなる人の邸宅ていたくになつて居るか知らぬけれど、あの井戸ばかりは依然として、古い古い柳おいぎの老木と共に、あの庭の片隅に残つて居るであらうと思う。

井戸の後うしろは一帶に、崇りを恐れる神殿の周圍まわりを見るよう、冬でも夏でも真黒しずかに静しずかに立つて居る杉の茂りが、一層其あたりの辺を気味わるくして居た。杉の茂りの後うしろは忍しのび返がえしをつけた黒板塀くろいたべいで、外なる一方は人ひと通とのない金剛寺坂上こんごうじさかうえの往来、一方はその中取払いになつて呉くればと、父が絶えず憎んで居る貧民窟ひんみんくつであ

る。もともと分れ分れの小屋敷を一つに買占めた事とて、今では
 同じ構かまえうち内うちにはなつて居るが、古井戸のある一隅いちぐうは、住宅の
 築かれた地所からは一段坂地さかちで低くなり、家人かじんからは全く忘れら
 れた崖下の空地である。母はなぜ用もない、あんな地面を買つた
 のかと、よく父に話をして居られた事がある。すると父は崖下へ
 貸長屋かしながやでも建てられて、汚い瓦屋根だの、日に干す洗濯物なぞ
 見せつけられては困る。買占めて空庭あきにわにして置けば閑静でよい
 と云つて居られた。父にはどうして、風に吠え、雨に泣き、夜よを
 包む老樹の姿が恐くないのであろう。角張つた父の顔が、時とし
 ては恐しい松の瘤こぶよりも猶なほ空そら恐おそしく思われた事があつた。
 或る夜よ、屋敷へ盗棒どろぼうが這入はいつて、母の小袖こそで四五点を盗んで行

つた。 翌よくちよう 朝でいり 出入とびの鳶とびの者や、大工の棟とうり 梁よう、警察署からの
 出張員が来て、父が居間の縁側もなかづたいに土足の跡を検査して行く
 と、丁度冬の最中うしろ、庭一面の霜しもばしら 柱しらを踏み砕いた足痕あしあとで、盗
 賊は古井戸の後の黑板塀うしろから邸内に忍しのび入ったものと判明した。
 古井戸の前には見るから汚らしい古手拭ふるてぬぐいが落ちて居た。私は昔
 水戸家みとけへ出入りしたとか云う頭かしらの清五郎せいごろうに手を引かれて、生れ
 て始めて、この古庭の片隅、古井戸のほとりを歩いたのであつた。
 古井戸の傍そばに一株の柳がある。半ば朽ちた其幹そのは黒い洞穴ほらあなにう
 がたれ、枯れた数条の枝の悲しげに垂れ下つた有様。それを見た
 だけでも、私は云われぬ気味悪さに打たれて、埋うずめたくも埋うずめら
 れぬと云う深い深い井戸の底を覗いて見ようなぞとは、思いも寄

らぬ事であつた。

敢て私のみではない。盗難のあつた其れ以来、崖下の庭、古井戸の附近は、父を除いて一家中の異懼恐怖の中心点になつた。丁度、西南戦争の後程もなく、世の中は、謀反人だの、刺客だの、強盗だのと、殺伐残忍の話ばかり、少しく門構の大きい地位ある人の屋敷や、土蔵の厳めしい商家の縁の下からは、夜陰に主人の寢息を伺つて、いつ脅迫暗殺の白刃が畳を貫いて閃き出るか計られぬと云うような暗澹極まる疑念が、何処となしに時代の空気の中に漂つて居た頃で、私の家では、父とも母とも、誰れの発議とも知らず、出入の鳶の者に夜廻りをさせるようにした。乳母の懷に抱かれて寝る大寒の夜な夜な、私は夜廻の拍

ようしぎ 子木の、如何に鋭く、如何に冴えて、寝静つた家中かちゆうに遠く、響き渡るのを聞いたであろう。ああ、夜よるほど恐いもの、厭なものは無い。三時の茶菓子おやつに、安藤坂あんどうざかの紅谷べにやの最中もなかを食べてから、母上を相手に、飯事ままごとの遊びあそびをするかせぬ中うち、障子に映る黄い夕陽の影の見る見る消えて、西風にしかぜの音、樹木に響き、座敷とこのの間まの黒い壁が、真先に暗くなつて行く。母さんお手水ちようずにと立たつて障子を明けると、夕闇の庭つづき、崖たけの下はもう真暗まつくらである。私は屋敷中で一番早く夜よるになるのは、古井戸のある彼あの崖下……否よる、夜は古井戸の其底から湧出わきでるのではないかと云う感じが、久ひさしい後のちまで私の心を去らなかつた。

私は小学校へ行くほどの年齢になつても、伝通院でんずういんの縁えんにち日ひで、

からくりの画看板えかんばんに見る皿屋敷のお菊きく殺し、乳母が読んで居る四谷怪談よつやかいだんの絵草紙えそうしなぞに、古井戸ばかりか、丁度其の傍そばにある朽ちかけた柳の老木おいきが、深い自然の約束となつて、夢にまで私をおびえさせた事が幾度だか知れなかつた。恐いものは見たい。恐る恐る訊く私が知識の若芽わかめを乳母はいろいろな迷信はさみの鋏きりつまで切摘んだ。父親は云う事を聴かないと、家うちを追出して古井戸の柳へ縛りつけるぞと怒鳴どなつて、爛らんまんたる児童の天真てんしんを損なう事をば顧かえりみなかつた。ああ、恐しい幼少の記念。十歳を越えて猶なお、夜中やちゆう一人で、厠かわやに行く事の出来なかつたのは、その時代に育てられた人の児この、敢て私ばかりと云うではあるまい。

父は内閣を「太政官たじょうかん」大臣を「卿きょう」と称した頃の官吏かんにりの一いち

人であつた。一時、頻いちじしきりと馬術に熱心して居られたが、それも何時しか中止になつて、後のち四五年、ふと大だいきゆう弓きゆうを初められた。毎まいちよう

朝 役所へ出勤する前、崖あさかげの中ちゆうふく腹はらに的のちを置いて古井戸の柳やなぎを脊せきにして、涼しい夏の朝あさ風かぜに弓ゆみづる弦なを鳴ならすを例としたが間まもなく秋が来て、朝寒あささむの或日ある、片肌脱かたはだぬぎの父は弓を手にした儘まま、あわただしく崖の小道を馳かけあが上あつて来て、皺しわが枯れた大声に、

「田崎たざき々々！ 庭に狐が居る。早く来い。」と、どなられた。

田崎と云うのは、父と同郷の誼よしみで、つい此あいだの間から学がく僕ぼくに住込んだ十六七の少年である。然しかし、私には、如何にも強つよそうなその体格と、肩を怒らして大声に話す漢語交りの物云いとで、立派な大人のように思われた。

「先生、何の御用で御座います。」

「怪しからん、庭に狐が居る、乃公が弓を引いた響に、崖の熊くまぎ 笹ささの中から驚いて飛出した。あの辺へんに穴があるに違いない。」

田崎と抱車夫かかえしやふの喜助きすけと父との三人。崖を下りて生茂なまきつた熊笹くまぎの間あいだを搜したが、早くも出勤の刻限きげんになった。

「田崎、貴様、よく搜して置いて呉くれ。」

「はあ、承知しました。」

玄関に平伏した田崎は、父の車が砂利を轆きしつて表門を出るや否や、小倉袴こくらばかまの股立ももたち高く取つて、天秤棒てんびんぼうを手に庭へと出た。

其の時分の書生のさまなぞ、今から考えると、幕府の当時と同様、可笑おかしい程主従しゅじゆうの差別のついて居た事が、一挙一動いっきよいちどう思出

される。

何事にも極く砕けて、優しい母上は田崎の様子を見て、

「あぶないよ、お前。喰いつかれでもするといけないから、お止しなさい。」

「奥様、堂々たる男子が狐一匹。知れたものです。先生のお帰りまでに、きつと撲殺してお目にかけます。」

田崎は例の如く肩を怒らして力味返った。此の人は其後陸軍士官となり日清戦争の時、血気の戦死を遂げた位であつたから、殺戮には天性の興味を持って居たのであろう。日頃田崎と仲のよくない御飯焚のお悦は、田舎出の迷信家で、顔の色を変えてまで、お狐さまを殺すはお家の為めに不吉である事を説き、田崎

は主命しゅめいの尊ととさ、御飯みい焚たき風情くちばしの嘴くちばしを入いれる処ところでないと一言いちごんの下もとに排斥しして仕舞しまった。お悦えつは真赤ましかな頬ほをふくらし乳母にゅうぼも共々ともとも、私わたしに向むかつて、狐きつねつき、狐きつねの崇たかり、狐きつねの人ひとを化ばかす事こと、伝通院裏でんつういんの沢たくぞ蔵ういなり稻荷いなぎの靈れい驗げんなぞ、こまごまと話わして聞きかせるので、私わたしは其その頃ころよく人の云いうこつくり様さまの占ういなぞ思おも合あせて、半なかばは田崎たさきの勇ゆうに組くみして、一いっ緒しょに狐退治きつねたいぢに行いきたいようにも思おもい、半なかばは世よにそ

う云いう神秘しんぴもあるのか知しらと疑ういもしたのであつた。

ひるめし

午ひるめし飯いが出来いたと人ひとから呼よばれる頃ころまで、庭中ていぢゆうの熊くま笹ささ、竹たけ藪ぶしの間あいだを歩あき廻まつて居いた田崎たさきは、空くうしく向む脛こうずねをば笹ささや茨いばらで血ちだらけに搔割かきざき、頭あたまから顔中かほぢゆうを蛛くもの巢くわだらけにしたばかりで、狐きつねの穴あならしいものさえ見み付け得えずに帰かへつて来きた。夕ゆう方かた、父ちち親おやにつづい

て、淀井よどいと云う爺さんがやって来た。それは殆ど毎日のよう、父には晩酌ばんしやく 囲碁のお相手、私には其頃出来た鉄道馬車の絵などをかき、母には又、海老蔵えびぞうや田之助たのすけの話をして、夜も更渡よふけわたるまでの長尻ながしりに下女を泣かした父が役所の下役、内証ないしょうで金貸かねかしをもして居る属官ぞっかんである。父はこの淀井を伴い、田崎が先に提灯ようちんをつけて、蟲の音ねの雨かと疑われる夜更よふけの庭をば、二度まで巡回された。私は秋の夜よの、如何に冷かに、如何に清く、如何に蒼あおいものかを知ったのも、生れて此の夜よが初めてであった。

母上は其の夜よの夜半よなか、夢ではなく、確かにこんこんと云う啼なき声を聞いたとの話。下女は日が暮れたと云ったら、どんな用事があつても、家の外うちへは一歩ひとあしも踏出さなくなつた。忠義ちゆうぎ一いち図ずの

御飯焚お悦は、お家いえに不吉きざしのある兆きざしと信じて夜明に井戸の水を浴びて、不動様を念じたために風邪を引いた。田崎が事の次第を聞付けて父に密告したので、お悦は可哀かあいそうに、馬鹿をするにも程があるとして、厳こごしいお小言こごとを頂ちようだい戴だいした始末。私の乳母は母上と相談して、当らず触らず、出入りの魚屋「いろは」から犬を貰つて飼ない、猶な時々は油揚なをば、崖の熊笹の中へ捨てて置いた。

父親は例の如くに毎朝早く、日に増す寒さをも厭いとわず、裏庭の古井戸に出て、大弓を引いて居られたが、もう二度と狐を見る機会がなかった。何処まいこから迷込まいこんだとも知れぬ瘦せた野良犬の、油揚を食つて居る処うちを、家の飼犬はげが烈はげしく噛み付いて、其の耳を喰切つた事がある。一家中いっかじゆう、何時とはなく、狐は何処へか逃げてし

まった。狐ではなく、あれも矢張り野良犬であつたのかも知れぬと、自然に安堵の色を見せるようになった。もう冬である。

「寒くなつてから火鉢ひばちの掃除する奴があるか。気のきかん者ばかり居る。」と或朝、父の小言が、一家中いっかちゆうに響き渡つた。

がたんがたと、戸、障子、欄間らんまの張紙はりがみが動く。縁先の植込みに、淋しい風の音が、水でも打ちあけるように、突然聞えて突然に断たえる。学校へ行く時、母上えりまきが襟巻えりまきをなさいとて、筆筒たんすの曳出ひきだしを引開けた。冷えた広い座敷の空気に、樟しょう 脳のうの匂においが身に浸渡ひるるように匂ひつた。けれども午過ひるすぎには日の光あが暖あたく、私は乳母や母上と共に縁側の日向ひなたに出て見た時、狐きつね 捜さがしの大騒おどろぎのあつた時分とは、庭の様子が別世界のようになつて居るのをば、

不思議な程に心付いた。梅の樹、碧梧の梢が枝ばかりになり、
 芙蓉や萩や雞頭や、秋草の茂りはすっかり枯れ萎れてしまつ
 たので、庭中はパツと明く日が一ぱいに當つて居て、嘗て、小蛇
 蟲けらを焼殺した埋井戸のあたりまで、又恐しい崖下の真黒
 な杉の木立の頂きまでが、枯れた梢の間から見通される。崖の下
 り口に立つ松の間の、楓は、その紅葉が今では汚い枯葉になつて、
 紛々として飛び散る。縁先の敷石の上に置いた盆栽のはぜには一二
 枚の葉が血のように紅葉したまま残つて居た。父が書齋の丸まるまじ
そと窓外に、八手の葉は墨より黒く、玉の様な其の花は蒼白く輝
 き、南天の実のまだ青い手水鉢のほとりにやぶふうぐいす藪鶯のささなき笛啼が
たえま絶間なく聞えて屋根、軒、窓、庇、庭一面に雀の囀りはかしまし

い程である。

私は初冬の庭をば、悲しいとも、淋しいとも思わなかつた。少くとも秋の薄曇りの日よりも恐しいとは思わなかつた。散り敷く落葉を踏み砕き、踏み響かせて馳せ廻るのが、却て愉快であつた。然し、植木屋の安が、例年の通り、家の定紋を染出した印半纏をきて、職人と二人、松と芭蕉の霜よけをしにとやつて来た頃から、間もなく初霜が午過ぎから解け出して、庭へはもう、一足も踏み出されぬようになった。

家の飼犬が知らぬ間に何処へか行つてしまつた。犬殺しにやられたのだとも云うし、又、いい犬だったから、人が盗んで連れて行つたのだとも、議論はまちまちであつた。私は是非とも、新に二度目の飼犬を置くように主張したが、父は犬を置くと、さかりの時分、他処の犬までが来て生垣を破り、庭を荒すからとて、其れなり、家中には犬一匹も置かぬ事となつた。尤も私は、その以前から、台所前の井戸端に、ささやかな養鶏所が出来て毎日学校から帰ると雞に餌をやる事をば、非常に面白く思つて居た処から、其の上にもと、無理な駄々を捏る必要もなかつたのである。如何に幸福な平和な冬籠の時節であつたらう。気味悪い狐の事は、下女はじめ一家中の空想から消去つて、夜晩く行く人の

足音に、消魂しく吠え出す飼犬の声もなく、木枯の風が庭の大だいじ樹ゆをゆする響ひびに、伝通院でんつういんの鐘の音はかすれて遠く聞える。しめやかなランプの光の下に、私は母と乳母とを相手に、暖い炬燵こたつにあたりながら絵草紙錦えぞうしにしきえ絵を繰りひろげて遊ぶ。父は出入りの下した役やく、淀井よどいの老人を相手に奥の広間、引廻ひきまわす六枚屏風ろくまいびょうぶの陰かげでパチリパチリ碁を打つ。折々は手を叩いて、銚子ちようしのつけようが悪いと怒鳴る。母親は下女まかせには出来ないとして、寒い夜よを台所へと立って行かれる。自分は幼おさなごころ心に父の無情にくを憎く思おもつた。

年の暮ちかづが近ちかいて、崖下の貧民窟ちんみんくわくで、提灯の骨けずりをして居た御維新前ごいしんぜんのお籠同心かごどうしんが、首をくくつた。遠からぬ安藤坂あんどうざかうえ上

の質屋へ五人連の強盜が這入つて、十六になる娘を殺して行つた。
 でんつういんちない まつじ 伝通院地内の末寺へ盜棒が放火をした。水戸様時分に繁はんじよ
う昌した富坂上の何とか云う料理屋が、いよいよ身代限りしんだいかぎを
とみざかうえした。こんな事をば、出入の按摩あんまの久きゆう齋さいだの、魚屋さかなやの吉きちだ
 の、鳶とびの清五郎せいごろうだのが、台所へ来ては交かわる交がわる話をして行つたが、
 然し、私には殆ど何等ほとんなんらの感想をも与えない。私は唯らいだ来はる春、正
 月こづかいでなければ遊かんぎびに來ない、父が役所の小使こづかい勘三郎かんざぶろうの爺おややと、
くもんりゆう九紋龍くもんりゆうの二枚半にまいはんへうなりを付けて上げたいものだ。お正月に風
 が吹けばよいと、そんな事ばかり思つて居た。けれども、出入り
 の八百屋ごようきの御用はるこう聞き春公うちと、家の仲なか働はたらきお玉たまと云うのが何時いつ
 か知ら密通みつつうして居て、或夜あるよ、衣類せおを脊負せおい、男女手を取つて、

裏門の板塀いたべいを越して馳落かけおちしようとした処を、書生の田崎が見付けて取押とりおさえたので、お玉は住吉町すみよしちようの親元へ歸されると云う大騒ぎだけは、何の事か解わからずなりに、然し私は大変な事だと感じた。お玉が泣きながら、白髪しらがの母親に手を引かれ、裏門をくぐって行く後姿うしろすがたは、何となく私の目にも哀れであつた。此れ以来、私には何だか田崎と云う書生が、恐いような、憎いような気がして、あれはお父さんのお氣に入りで、僕等だの、お母さんなどには悪い事をする奴であるように感じられてならなかつた。

正月一ぱい、私は紙鳶たこを上げてばかり遊び暮した。学校のない日曜日には、殊更に朝早く起出おきいでて、冬の日の長からぬ事を恨んだが、二月になつて或る日曜日の朝は、そのかいてもなく雪であつ

た。そして、ついぞ父親の行かれた事のない勝手口の方に、父の太い皺枯れた声がする。田崎が何か頻りに饒舌しやべり立てて居る。毎朝近所から通つて来る車夫喜助きすけの声もする。私は乳母きものが衣服きを着換かえさせようとするのも聞かず、人々の声する方に馳け付けたが、あがりがまち上か 框ふところに懐うしろむ 手して後向うしろむきに立つて居られる母親の姿を見ると、私は何がなしに悲しい、嬉しい気がして、柔やわらかい其の袖にしがみつかきながら泣いた。

「泣蟲あさつばらツ、朝あさ 腹はらから何なんだ。」と父は鋭しつたい叱咤しつたの一声。然し、母上は懐の片手を抜いて、静に私の頭かしらを撫で、

「また、狐が出て来ました。宗ちゃんの大好きな雞とりを喰べてしまつたんですつて。怖いじゃありませんか。おとなしくなさい。」

雪は紛々ふんぶんとして勝手口から吹き込む。人達の下駄の齒についた雪の塊なが半ばなか解けて、土間の上は早くも泥濘どろになつて居た。御飯焚のお悦、新しく来た仲働、小間使、私の乳母、一同は、殿様が時ならぬ勝手口にお出での事とて戦々せんせんきようきよう恟々せうせうとして、寒さに顫ふるえながら、台所の板の間に造り付けたように坐つて居た。父は田崎が揃えて出す足駄あしだをはき、車夫喜助の差翳さしかぎす唐傘からかさを取り、勝手口の外、井戸端の傍そばなる雞小屋とりこやを巡見じゆんけんにと出掛ける。

「母さん。私も行きたい。」

「風邪引くといけません。およしなさい。」

折から、裏門のくぐりを開けて、「どうも、わりいものが降り

やした。」と鳶の頭清五郎がさしこの頭巾ずきん、半纏はんてん、手甲てっこうがけの火事装束かじしようぞくで、町内を廻る第一番の雪見舞いとやって来た。

「へえツ、飛んでもねえ。狐がお屋敷の雞とりをとったんでげすつて。

御維新此このかた方ア、物騒でげすよ。お稻荷様も御扶持ごふちばな放れで、油揚

の臭におい一つかげねえもんだから、お屋敷へ迷込んだげす。訳わけア御ごわ

せん。手前達でしめつちまいやしよう。」

鳶の清五郎は雞小屋の傍まで、私を脊負おぶつて行つて呉くれた。

今朝方あかつき、暁あかつきかけて、津しんしん々と降り積つた雪の上を忍び寄り、狐

は竹垣かきみだの下の地じを掘つて潜くぐりこ込んだものと見え、雪と砂とを前足

で搔乱かきみだした狼藉ろうぜきの有様。竹たけがまえ構かまえの中は殊更に、吹込む雪の

上を無惨とびちに飛散とびちる雞とりの羽ばかりが、一点二点、真赤な血したたの滴たりさ

え認められた。

「御前ごぜん、訳ア御わせん。雪の上に足痕あしあとがついて居やす。足痕をつけて行きやア、篠田しのだの森ア、直ぐと突止めつきとまさあ。去年中から、へーえ、お庭の崖に居たんでげすか。」

清五郎の云う通り、足痕は庭から崖を下り、松の根元で消えて居る事を発見した。父を初め、一同、「しめた」と覚えず勝利の声を上げる。田崎と車夫喜助が鋤すきくわで、雪をかき除のけて見ると、きよねんじゆう去年中あれほど搜索しても分らなかつた狐の穴は、冬も茂るくまささ熊笹かげの蔭かげにありあり見えすいて居る。いよいよ狐退治ひようぎの評議ひようぎが開かれる。

喜助は、唐とうがらし辛しんでえぶせば、奴やつこさん、我慢が出来ずにこんこ

ん云いながら出て来る。出て来た処を取ツちめるがいいと云う。田崎は万一逃げられると残念だから、穴の口元へ罾か其れでなくば火薬を仕掛ける。ところが、鳶の清五郎が、組んで居た腕を解いて、傾げる首と共に、難題を持出した。

「全体、狐ツて奴は、穴一つじやねえ。きつと何処にか抜穴を付けとくつて云うぜ。一方口ばかり堅めたつて、知らねえ中に、裏口からおさらばをきめられちや、いい面の皮だ。」

一同、成程と思案に暮れたが、此の裏穴を捜出す事は、大雪の今、差当り、非常に困難なばかりか寧ろ出来ない相談である。

一同は遂にがたがた寒さに顫出す程、長評定を凝した結果、止むを得ないから、見付出した一方口を硫黄でえぶし、田崎は家

にある鉄砲を準備し、父は だいきゆう 大弓に矢をつがい、喜助は てんびん 天秤棒、鳶の清五郎は鳶口、折から、すこしおく 少く後れて、例年の雪掻きにと、植木屋の安が来たので、また 此れ亦、天秤棒に加わる事となつた。

父は洋服に着換る為め、ひとまず 一先屋敷へ這入る。田崎は でんずういん 伝通

院前まえの生薬屋きぐすりやに硫黄いおうと烟えん硝しょうを買いに行く。残りのものは

いっしょうだる

一升樽いっしょうだるを茶碗飲みにして、準備の出来るのを待つて居る騒ぎ。

と兔や角かくと暇取ひまどつて、いよいよ穴の口元をえぶし出したのは、もう

午近くなつた頃である。私は一同に加つて狐退治の現状を目撃したいと云つたけれど、厳しく母上に止められて、母上と乳母の三人で、例の如く座敷の炬燵に絵草紙をくりひろ繰ひろ拵ひろげはしたものの、立

ったり坐つたり、気も気では無い。鉄砲の響と云えば、十二時の
 「どん」しか聞いた事がない。あれは遠い丸の内、それでも天気
 のいい時には吃驚びつくりするほど座敷の障子を揺ゆる事さえある、され
 ば、すぐ崖下に狐を打殺うちころす銃声は、如何に強く耳を貫くであろ
 う。家中いえじゆうの女共も同じ事、誰たれか狐に喰くいつかれはしまいか。お
 狐様うちは家の中まで荒あはれ込んで来はしまいか。お念仏となを称となえるもの、
 お札ふだを頂たくものさえあつたが、母上は出入のもの一同に、振舞ふるまい
ざけ酒の用意をするようにと、こまこま云付けて居られた。

私は時々縁側に出て見たが、崖下には人いちにん一人も居ないように
 寂として居て、それかと思う烟けぶりも見えず、近くの植込あいだの間から、
 積つた雪の滑り落ちる響が、淋し気に聞えるばかり。暗澹あんたんたる

空は低く垂れ、立木の梢は雲のように霞み渡つて居ながら、紛々
 として降る雪、満々として積る雪に、庭一面は朦朧として薄
 暮れよりも明かつた。母と二人、午飯ひるはんを済まして、一時も過ぎ、
 少しく待ちあぐんで、心疲れのして来た時、何とも云えぬ悲惨な
 叫さけびごえ声。どつと一度に、大勢の人の凱歌がいかを上げる声。家かちゆう中の
 者皆障子を蹴倒けたおして縁側へ駈かけ出た。後あとで聞けば、硫黄でえぶし
 立てられた獣物けものの、恐る恐る穴の口元へ首を出した処をば、清五
 郎が待構えて一打ちに打うちおろ下す鳶口、それが紛まぐれ当りに運好くも、
 狐の眉間へと、ぐつさり突刺つて、奴さん、ころりと文句も云わ
 ず、悲鳴と共にくたばつて仕舞つたとの事。大弓を提さげた偉大の
 父を真先に、田崎と喜助が二人して、倒さかさまに獲物を吊した天秤棒を

かつぎ、其の後に清五郎と安が引続き、積つた雪を踏みしだき、
 隊伍正しく崖の上に立現われた時には、私はふいと、絵本で見る
 忠臣蔵の行列を思出し、ああ勇しいと感じた。然し真近く進
 んで、書生の田崎が、例の漢語交りで、「坊ちゃん此の通りです。
 天網恢々疎にして漏らさず。」と差付ける狐を見ると、鳶口
 で打割られた頭蓋と、喰いしばった牙の間から、どろどろした
 生血の雪に滴る有様。私は覚えぬ柔い母親の小袖のかげにその顔
 を蔽いかくした。

さて、午過ぎからは、家中大酒盛をやる事になつたが、生
 憎とこの大雪で、魚屋は河岸の仕出しが出来なかつたと云う処
 から、父は家の雞を殺して、出入の者共を饗応する事にした。

一同喜び、狐の忍入った雞小屋から二羽の鶏とりを捕えて潰した。黒いのと、白い斑ふちある牝鶏めんどり二羽。それは去年の秋の頃、綿わたのような黄金色こがねいろな羽に包まれ、ピヨピヨ鳴いていたのをば、私は毎日学校の行ゆきかえ帰り、餌えを投げ菜なをやりして可愛がったが、今では立派ふたとに肥はった母鶏ははどりになったのを。ああ、二羽が二羽とも、同じ一声の悲鳴と共に、田崎の手に首をねじられ、喜助の手に毛むしをられ、安の手に腹を割かれ、腸わたを引出されて了しまった。夜更けまで、舌なめずりしながら、酒を飲んで居る人達の真赤な顔が、私には絵草紙で見る鬼の通りに見えた。

眠りながら、その夜よ私は思った。あの人達はどうして、あんなに、狐を憎くんだのであろう。鶏とりを殺したとて、狐を殺した人々

は、狐を殺したとて、更に又、にわとり鶏を二羽まで殺したのだ。

ああ、ツルゲネーフは、蛇と蛙の争いから、幼心に神の慈悲心を疑うたぐった。私はすこしく書物を読むようになるが早いから、世に裁判と云い、懲罰と云うものの意味を疑うようになったのも、或はあるい遠い昔の狐退治。其等それらの記念が知らず知らずの原因になって居たのかも知れない。

青空文庫情報

底本：「荷風全集 第六卷」岩波書店

1992（平成4）年6月8日発行

底本の親本：「歓楽」易風社

1909（明治42）年9月20日

初出：「中学世界 第十二巻第一号」博文館

1909（明治42）年1月1日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

※底本は総ルビですが、読みやすさを考慮して振り仮名の一部を

省きました。

※「パチリバチリ」の底本における表記は、「パチリ／＼」です。

入力：渡辺哲史

校正：米田

2012年5月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

狐

永井荷風

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>